

# つくばのほうき ほうき草

TOKYO DESIGNERS WEEK2011 ASIA AWARDS 東京都明治神宮外苑絵画館前 2011.11 参加学生 10 名



## 種蒔きから、ほうき作りまで。

ほうき制作は、農閑工芸の代表的なものである。つくばでは、明治中期からほうき草の栽培と共に、ほうきが生産されている。製造戸数は数百戸にまでなった時期もある。現在、ほうき草の栽培から制作まで行う専業の技術者は、酒井豊四郎氏のみである。農閑工芸の教育プログラムでは、制作する素材の採取から加工までを行うことを一つの目標としていた。

筑波大学は総合大学であり芸術専門学群の他、全学を対象とした木工実習を開設している。木材は有史以来、人に使われてきた素材だが、手工具で加工するというシンプルな実習課題において、実材を扱う技術や応用力、想像力の不足がうかがえる。教育現場において安易な教材が氾濫していることもその一因かもしれない。素材を理解し、素材の特性を生かした「農閑工芸」の手法を取り入れることは、教育の場においてもなお有効であると考え。工芸素材といっても現在は専門店やインターネットで手に入る物が多い。しかし、素材を深く理解するためには、元の姿や質感、重さなどを体感する事が有効と考える。そこから、新しい素材の使用方法や造形のヒントが見つかる可能性がある。

酒井氏の工房を訪ね、ほうき草の栽培とほうき制作について調査した。ほうき草は春に種をまき、夏には収穫される。脱穀や感度の工程を行うとすぐにほうき制作が可能である事が分かった。これまで、東北地方を中心に調査を行ってきたが、大学から車でわずか10分という近い場所に、最適の実践場所が見つかった。酒井氏の多大なる協力を得て、「種蒔きから、ほうき作りまで」を行うことができた。



前年度に収穫したほうき草の種





5月22日 農具を使わない畝作り。



種蒔き。



蒔き終わったら、足で土をかけて平らにする。足跡だけが残る。  
種蒔きからおおよそ75日程で刈り取りの時期を迎える。



6月4日 発芽。連絡を受け畑へ。平均して10cm程の苗になっていた。  
イネ科のすらっとした苗。



葉が、5枚程になったら間引く。



7月28日刈入れも一切道具を使わない。穂の付いた茎を右手に持ち、左手に葉を持ちながら裂くように刈り取る。



収穫。





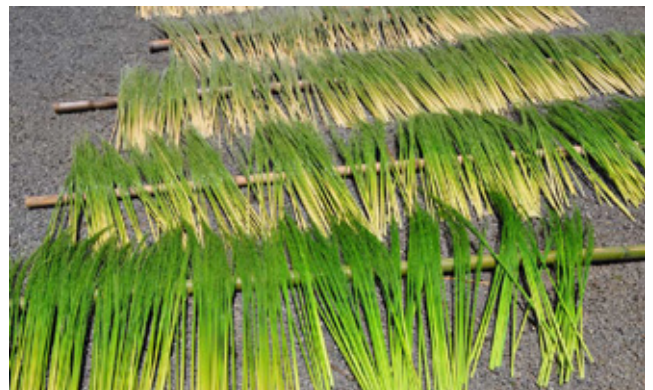
刈り取り後、すぐに脱穀をする。ほうき草の実は畑にまき肥料となる。



脱穀した後、灰汁を取り除く。茎の部分は3分間熱湯に漬け、穂の部分は2分間漬ける。



熱湯に漬けた後は、すぐに水に付け熱を冷ます。



すぐに天日で干す。1日に4回ほど返ししながら、必要に応じて数日繰り返す。



8月5日

乾燥したほうき草を仕分ける。刈入れの際、穂の付いた茎を裂くと、その1段下の葉の元からきれいに刈り取る事ができる。その茎の長さを利用して、茎が持ち手となるほうきのデザインもある。

まずは、穂先の脇から伸びた太い穂を剪定する。剪定された穂は、小ほうきや、ほうきの芯材となる。それから穂の長さ、大きさごとに数種類に分ける。ほうきとなった時柔らかい穂先がそのままほうきの先端になるようにする。

酒井氏の作るほうきは、この作業を丁寧に行っており、大きさの違う様々なほうきでも、穂先から芯のところまで全体に均一のしなり方をする。茎が長く余分な所は押し切りという道具でカットして、ほうきの芯材に用いる。



仕分けられたほうき草。5月22日の種蒔きから7月28日の収穫まで、67日間でほうきの素材を得る事が出来た。



穂が黒くなるまで畑で育てたものを、日陰で干して次年度の種とする。